

COLUMN

鎌倉の猫事情
第三十五話

グーニーと灰色猫の闘いは、毎日毎晩、飽くことなく繰り返されています。ミルクホールの裏路地は、近所の人達が見守る戦場となりました。そして、灰色猫の優勢は、もう誰の目から見てもあきらかです。手負いのグーニーと、勝ち誇って我がもの顔に裏路地をのさばり歩き、ボス然と権勢をふりかざす灰色猫。グーニーくんへ集まる同情の眼差し。グーニーはなにもかもじっと耐え忍んでいました。グーニーとスイービー、長女のすみれとやっと大きくなったばかりの長男のクウの四匹家族。すみれはスイービーそっくりの色白の縞猫で青い目が愛らしいのですが、体は小ぶりなのに気の強いところのある女の子です。クウはグーニー似のシャム猫で小さい頃から、少しぼおとしたところのある気の優しい猫です。とても灰色猫の相手になるものではありません。一家四匹の暮らしはいつでも、ただ一匹の灰色猫に脅かされていました。猫達がのんびりと日向ぼっこしている物干し台に、不敵に現われる灰色猫。一家は日当たりの良い物干し台を明渡さなければなりません。ついこの前まで、何事もなく平和な暮らしを当たり前を送っていた、猫達にとって、毎日が突然の襲撃への不安と恐怖の日々なのです。事実灰色猫は、あるうことが、我家への侵入も何度か試みているのです。その時は、なんとなくただならぬ気配に私達が気づいて、侵入を阻止する事ができました。が、ある晩のこと。猫達が入り口としている私の部屋の窓の外に、何か黒い大きな影がはりついているのが見えます。グーニーが帰って来たのかと思い、窓を明けてみると、窓枠に座り込んだグーニーより一回り大きな灰色猫が、不敵な笑いを浮かべるように、私を見上げています。私自身、背筋が寒くなる思いがしてぞっとしたのを今でもはっきりと思い出します。もちろん毅然として叩き落としてやりましたが、そんなことどこ吹く風とばかりに、窓辺への侵入を繰り返すのです。ある時は、今はもう雨戸のなくなった戸袋の中へ、気の弱いクウを追い詰めて威嚇し、怖い顔で唸り声を響かせていたこともありました。戦場は、路地から家の中へと迫ってきていたのです。屋根は毎晩のように猫達が走り回る音で軋んでいました。そんな屋根の上での緊張の日々が続いてきたある晩の出来事です。今思うと、あの日のことが、グーニー一家の運命を、大きく変えたという気がしてならないのです。 **to be continued**



Café

2 cafe' LEON

1974年1月某日 PM8:00 原宿表参道にて



冷たい冬の風が吹く街。真っ暗な通りには、大きな櫛の街路樹が揺れていた。人の気配もなく、長く続く古びたアパートの窓に、時折ポツリポツリと明かりが灯るだけの街。シャッターが閉められた外人専用の大きな骨董店、冷たくそびえる白いビル。まだ、8時を過ぎたばかりというのに、この街は眠ったように静かだ。大きくゆるやかな坂道は、俺の為にあるように誰も歩くものもない。遠いところから低い車の轟音が聞こえている。その音は滑るように近づいて、闇の中では鮮やかに輝く、赤いランボルギーニが櫛の木の下に止まった。高級車のドアから現われたのは、毛皮の長いコートをはおった大柄な女性。車から降りた彼女が身をひるがえして向かったのは、交差点近くの「カフェ・レオン」その夜、表参道で明かりをつけていたただ一つの店。

ビルの一階にあるその店は、二つほど階段を上るとガラスのドアがある。15坪くらいの暗く冷たい店内。黒い壁におおわれた客席の中央には、ガラスの仕切りがあり、店を縦に区切っている。彼女はガラスの仕切りの向うに、白い横顔を見せて腰掛けていた。俺は反対側の椅子に腰掛けた。すると彼女は立ち上がって、店の男達に煙草の火を点けさせた。その中で、一際目立つ背中に加えて長髪で背の高い整った顔立ちの男が、彼女のお目当てなのだろう。彼女は男達の中でこれ見よがしに毛皮を脱ぎ捨てた。細身の体に、ぴったりとした白いシャツとジーンズ。鼻筋の通った白い横顔は、分厚いつけ睫毛と濃いアイシャドーで彩られている。しばらくひそひそと話し合っていた彼女が、何が面白かったのか、急に大声で笑い出した。……オトコ？ 彼女は彼だった。冷めたコーヒーにミルクを入れて飲みほし、そのガラガラした店を出た。櫛並木の通りには冷たい木枯らしと、輝く星空。もう一度交差点に向かうと、暗闇の中に教会の十字架が見えている。明日は、入学試験の日。さあ、もう宿へ帰って眠らなくちゃ……

